

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 91

2024年2月



イスラエル軍による空爆の後、負傷者を運ぶ人々。ラファの難民キャンプで。

イスラエルとハマスの軍事衝突はもう4か月以上、すでに夥しい人命が失われました。そして100万人以上が避難しているラファに大規模な攻撃が行われるかもしれないとか。まだこれから多くの血と涙が流されるのでしょうか？人の命の重さはみんな同じはず。大人でも子供でも、男性でも、女性でも、イスラエル人でもパレスチナ人でも…

東日本大震災のあと、5年にわたって3カ国の青年たちと共に被災地でボランティア。ある時、ご高齢の被災者の方が言われた言葉が忘れられません。「遠い所から助けに来てくれてありがとね！だけどあなたたちも苦しんでいるんだろ？ 大変だね～ ただあなたたちの苦しみは人間の争いから来るんだから、話し合いで解決できるんじゃないの？ 私たちの苦しみは、大自然から来るんだからどうにもできないけどね。」

武力では何も解決しないことを当事国双方が1日も早く悟って、交渉のテーブルについてくれることを心から願っています。

皆様、引き続きのご支援を心からお願いいたします。

井上 弘子

ISRAEL — JAPAN — PALESTINE
平和の架け橋
PROJECT
2023
HIROSHIMA・NAGANO・TOKYO
平和の架け橋プロジェクト 2023
報告を掲載



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email ispalejpn@gmail.com

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名
「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

ガザ緊急支援のご報告

井上弘子(当法人理事長)

支援者の皆様、昨年の11月から始めた「ガザ緊急人道支援」に、さっそくの援助をお寄せ下さり、ありがとうございます。おかげさまで、2月10日現在で4回にわたり、計500万円を送ることができました。送り先のエルサレム・ラテン総大司教区人道支援局、P. ピッツァバツラ枢機卿様から領収書とともに「日本の皆様の温かい連帯のお心に心から感謝します」とのお言葉が届いています。

今もご寄付が続いています。支援金は、他の国々からのお金と合わせて、民間人の避難所となっている二つの教会とその施設にいる2000人以上の人々の水や食料、医薬品、その他の生活必需品の購入のために使われています。避難所にはキリスト教徒だけでなく、イスラム教徒もいます。爆撃は2度ありました。一つの教会は10月19日、もう一つは12月16日、双方で子どもも含め、約20名の犠牲者、数十名の負傷者を出しました。

支援物資の搬入が滞る中、どうしても【闇市】での割高購入に



教会に届いた支援物資：配給の準備（ガザ：聖家族教会）

頼らざるを得ません！ 人々の命を最低限守るためにも多額のお金が必要になるのです。

どうぞ引き続きご支援を賜りますよう、お願いいたします。 皆様に感謝！



エルサレム・ラテン総大司教区人道支援事務局のロゴマーク。

イスラエルとパレスチナの狭間で不偏であるとは

村上 宏一(当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長)

能登地震で被災した人たちの厳しい避難生活の生々しい映像を見るにつけ、ガザでイスラエル軍の攻撃を受け避難した百数十万人のパレスチナ人たちの苦悩が、身近に感じられます。しかし、去年12月時点のイスラエルでの世論調査では、ガザの民間人の死者が2万人を超える事態を受けても、ユダヤ人回答者の8割が「ガザの苦しみを考えるべきではない」と答えたということです。パレスチナ支持を訴えると「反イスラエル」というレッテルを貼られ批判にさらされる、という現象も見られます。

残酷な奇襲攻撃をかけたイスラム組織ハマスと、激しい攻撃により多数の民間人を殺傷しているイスラエルと、どちらの肩も持ちたくない状況の中で、偏らないこと、不偏であるとはどういうことか、考えさせられます。

「反ユダヤ主義」のレッテル

米国議会下院で去年12月5日に開かれた公聴会で、ハーバード、ペンシルベニア、マサチューセッツ工科の有名な大学の学長は、ガザ戦争をめぐる反イスラエ尔的だと追及を受けました。「ユダヤ人のジェノサイド（集団虐殺）を求める人たちは貴大学の綱領に背くのか否か。イエスカノーかで答えなさい」というのです。3人が「表現の自由とのバランスを考慮すべきだ」といった答え方をしたのに対し、追及の先鋒に立った共和党議員たちは納得せず、大学に対し学長の罷免を要求。ハーバード大とペンシルベニア大の学長は辞任しました。

「ユダヤ人のジェノサイドを求める人たち」というのは、議員側の畏ともいえる表現です。「反ユダヤ」だからではなく、多くの民間人が犠牲になっている

ことに抗議を含めたパレスチナ支持やイスラエル非難が学内で強まったのを、抑制しなかったことをもって「反イスラエル」であり、「反ユダヤ主義を助長している」と決めつけるのです。

背景には、選挙に結びつくユダヤ人票を意識して親イスラエルを強調するということがあります。トランプ前大統領が現職の時、保守的で熱烈的なイスラエル支持者が多い福音派というキリスト教徒にアピールするため、一方的にイスラエルに肩入れしたのは記憶に新しいことです。

もう一つの背景として、欧米人の間には、第二次世界大戦時のナチスによるユダヤ人虐殺を傍観したという負い目の意識があります。私（筆者）の個人的体験ですが、1982年に、朝日新聞社のヘブライ語学留学生としてイスラエルへ行き、語学学校に通いました。そこにベルギーから来たという年輩の女性看護師がいて、イスラエルに来た動機について「自分たちはナチスのユダヤ人虐殺を見過ぎてしまった。何か助けになることをしたいと思い、まず言葉から勉強している」と言っていました。親の世代の話なのに、歴史に残る罪の意識はなかなかぬぐえないもので、特に国際政治の世界では「反イスラエル」即ち「ユダヤ人差別」と見られるのを恐れ、人種差別とは無縁のイスラエルの政策に対する批判をしようとする場合でも、批判の矛先が鈍りがちです。

客観的報道に徹するBBC

再び個人的体験を述べますと、前述の語学学校で知り合ったデンマークの青年に誘われて、ある組織の事務所に行った時のことです。そこにはユダヤ人差別やユダヤ人の受難の歴史に関する資料が並べられていました。内容は、いかに差別を受け虐待されてきたかを強調するあまり、排他的で攻撃的な主宰者のメッセージがあふれ、特にアラブ人に対する侮蔑的なものが目立ちました。見学後に私がその主宰者のことを「差別主義者だ」と述べたところ、誘ってくれた青年は目をむいて「なんてことを言う」というような表情を見せました。差別を受けてきたユダヤ人を差別主義者と呼ぶなんてとんでもない、という気持ちでしょう。しかし、その代表というのは



入植者により破壊されたヨルダン川西岸地区ザヌータ（南ヘブロン）の学校

メイル・カハネという極右政治家で、イスラエルの国会議員になったこともあります。彼がつくった政党「カハ」は後に「人種差別的、反民主主義的」であるとして、選挙への立候補を禁じられました。そんな人物の本質を見誤らずにすんだのは、私がユダヤ人迫害の歴史を持たず、過度な思い入れもない日本人だったからです。ちなみに、カハネ思想を支持していた人物が今、与党の極右政党指導者として閣内で重きをなしています。

イスラエルおよびパレスチナに関わる人々には、歴史学者、国際政治学者、国連関係者、支援に携わる人々など、それぞれの立場があります。私たちジャーナリストは、特定の組織が自分たちの主張に沿った意見の発信をするのとは違って、一方的な主張や見方に偏らずにできるだけ事実に迫る情報を伝えようとしています。

ガザ戦争を伝えている最近の報道の中で英国のBBC放送は、自分たちがイスラム組織ハマスを「テロ組織」と呼ばないことについて、国際報道部長名で次のような見解を述べています。

「政府の閣僚や新聞のコラムニスト、一般市民がこぞって『BBCは何故ハマスの戦闘員をテロリストと叫ばないのか。イスラエルに対しあんな残虐行為をしたのに』と言ってきます。それに対する答えはBBCの『客観的であれ』という報道理念です」

つまり、誰を支持するかとか誰を非難するか、あるいは誰が善人で誰が悪人かを告げるのはBBCの役目ではない、ということです。ハマスの例で言えば、政治家などがハマスをテロ組織だと非難するのは彼らの務めであり、インタビューで言ったことはそのまま伝えるけれども、BBCの声としては伝えない

と明言しています。そして、第二次世界大戦の時もナチスについてさえ「敵」と呼ぶことはあっても「邪悪な」といった呼び方はしなかったというのです。

歴史的事実を述べただけで

「反イスラエル」という批判を恐れずにイスラエルのガザ攻撃に苦言を呈したことで印象に残っているのは、国連のグテイレス事務総長の発言です。去年10月24日の国連安保理で「人道的停戦」を訴え、ハマスの攻撃を強く非難しつつも「何もないところから起きた事態ではないと認識することも重要だ。パレスチナの人々は56年間、息が詰まるような占領下に置かれてきた」と指摘。「我々がガザで目撃している明確な国際人道法違反について、深く憂慮している」と述べました。

イスラエル側は「テロ行為を容認している」と激怒、エルダン国連大使は「事務総長は被害者を責めており、辞任しなければならない」と主張しました。が、事務総長は被害者を責めたものではありません。イスラエルはハマスの攻撃が誰の目にも明らかな残虐行為だったことを盾にとって、自分たちは被害者であることばかりを強調します。その論法が効くのは、国際社会がテロ非難で同調、あるいは同調せざるを得ないことと、先に述べたように、イスラエルを批判することで「反ユダヤ主義」と言われたくないと尻込みする傾向が、欧米を中心に強いことが背景にあるからです。事務総長の発言は、難民支援などでパレスチナ人が置かれてきた状況を見てきた国連の立場からのもので、反イスラエルに偏っているのではなく、ハマスの批判しつつ、事件の歴史的背景を客観的に述べたものです。

先に、報道する側の立場について「客観的」ということを、BBCの例を引き合いにして強調しましたが、現地でヨルダン川西岸での不法な入植地拡大やパレスチナ人に対する抑圧政策を見聞きしていると、ジャーナリストの多くはイスラエルに対して批判的になりがちです。それでも、イスラエル批判を繰り広げるのではなく、パレスチナ人によるテロも、ユダヤ人入植者による横暴な振る舞いも、事実だけを伝えようとしています。



イスラエル人質の無事解放を願って一人ひとりの写真を飾る。(テルアビブ)

「生存権の保証」双方に等しく

では、偏らない報道を心がける際に基軸となるものは何か。それは、これまで折に触れ書いてきたことですが、生存権の保証という点で反イスラエルも反パレスチナもない、ということです。差別され虐待されてきた歴史を持つユダヤ人の生存権を保証するうえで、ホームランドとしてのイスラエル建国を否定はしない。ただし、それが既存のアラブ人を居住地から追い出す局面もあったこと、アラブ人の生存権の犠牲の上に成り立っていることを忘れてはならないはずだ。

この視点に立てば、ユダヤ人の生存権を脅かすテロ攻撃などは許されないし、パレスチナ人の生存権を脅かす空爆などの軍事攻勢や居住地を奪う占領政策、入植活動なども、等しく許されないものとして報道の対象にします。イスラエル側がユダヤ人の生存権を主張するのなら、パレスチナ人にも生存権が保証されねばならないことを認めるべきで、それにはパレスチナ国家建設による二国家共存にしか平和の道はありません。

しかし、今のイスラエルには、ハマスの攻撃＝ホロコーストという見方しかなく、国際社会に広がり始めたイスラエル批判を不当だと非難したり悲しんだりする声ばかりです。「ハマスの行為は許せないけど、ガザに対する破壊行為も目に余る」と見られることを受け入れられないのです。一方のパレスチナ側も、多数の民間人が犠牲になり生活基盤が破壊された怨みに満ちて、和平を語るどころではなく、イスラエル国家を認めないハマスに対する支持が増えています。いずれの側にも、内側から戦争を止める動きが出ることは望めません。

イスラエルに対し唯一影響力を及ぼせる米国で

は、二国家共存案を掲げるバイデン政権が、ガザでの民間人の犠牲に配慮するようイスラエルに働きかけていますが、圧力とまではいきません。今秋に控える大統領選挙でのイスラエル支持票が気になるからです。有力な対抗馬とみられるトランプ前大統領

の大票田であるキリスト教福音派勢力にはイスラエル支持が根強く、トランプ氏はイスラエル一辺倒の立場から揺さぶりをかけてくるでしょう。米国の大統領を選ぶ国内政治が、今後の中東情勢を大きく左右しかねないという気がかりな状況です。

ガザと家族のために平和を望む

ラミ・アルジェルダ (2018年プロジェクト参加)

私は生まれてからずっとガザで生活し、私たちの人生、コミュニティ全てがガザにはありました。しかし今、約4ヶ月前の自分の生活を思い出すことが難しいほど、すべてのことが変わってしまいました。

私がマルヤーンと結婚したのが2022年の5月、そして昨年6月には娘カイリーを授かりました。これまでに何度も紛争を経験し、乗り越えてきましたが、今回は、自分自身が家庭を持ち、子どもを持つ父親として初めての紛争です。うまく表現できませんが、自分が大変な時でも、まず先に自分の妻と子どものことを考えています。今の自分には父親としての新たな責任があるのです。

私はキリスト教信者です。ガザにおけるキリスト教徒の割合は非常に少なくなっており、約200万人の人口のうち約900人しかいません。小さなコミュニティなので全員がお互いのことを知っています。コミュニティの中で小さな問題があってもいつもみんなでも乗り越えてきました。私はこの紛争が始まってから2日後には躊躇せず自宅を飛び出し、聖ポルフィリウス教会に逃げこみました。他のメンバーもみんなこの教会に退避してきて、教会での避難生活もすでに4カ月以上、今も教会で生活しています。教会に“避難”しているというより、もう“生活の場”になっているのです。

毎日300人近くの人が寝ている教会のホールで目を覚まします。どうせ夜中には爆撃音によってしばしば起こされるので、目覚ましはかけません。

何とか避難所の生活を運営・管理するために、み

んなで役割と責任を分担して協力しています。支援物



ラミとその家族。

資を配ったり、何とか手作りトイレをつくったり、全員がシャワーを浴びたり洗濯したりできるようにスケジュールを作ったり。

しかし、この限られた空間でこれほどの人数で避難している人々のストレスは、想像を絶します。水、食料、医薬品、燃料といった生活必需品はいつでも供給されるかは闇市の価格次第、水道、電気、インターネットの使用もままなりません。新鮮な野菜や果物は長いこと食べられませんでした。毎日が辛く、その過酷さが日に日に増しているように感じます。私の娘は新生児のときに摂取すべき2つのワクチンを接種しておらず、また汚染された水のせいで体調を崩してしまいました。

このような状況でも今、私たちは、命を守るために一人一人ができることを全力でやり抜こうと必死に生きています。

休戦の時には久しぶりに教会から出ることができ、自宅の様子を妻と見に行ってきました。教会から出なければよかったと後悔するほど、そこには筆舌に尽くしがたい光景が広がっていました。家や建物は破壊されて瓦礫の山になり、どこが道路なのか境目がわからないほど、まるでホラー映画のような光景でした。言葉、動画、写真、何を使ってもガザの現状を伝えることはできないでしょう。それほど頭

では理解し難い状況だということです。

辛い、死んだと思っていた飼い猫のルキを見つけることができました。我が子のように可愛がっていたのでとても嬉しかったです。自宅に戻った時、次の爆撃で破壊されるのはこの家かもしれないと思い、家族が生活した家を隅々まで目に焼き付けました。結婚した当時、家族と一緒に快適に暮らしていけるように全財産を費やして建てた家です。こんなにも早くに失うとは想像もしていませんでした。

今では80%以上のガザの人々が住む家を失いました。お店を失い、失業した人も沢山います。その結果多くの人が路上での生活を強いられています。そのため、もし突然この紛争が終わったとしても、もし自分の家が爆撃から逃れて無事だったとしても、誰も紛争前の生活に戻ることはできないと思います。商店もスーパーマーケットも全て破壊されました。写真も、子どもの頃の記憶も、幸せを築いてきた場所も、人生で貴重な経験してきた場所も二度と戻りません。

現在も教会の周りで頻繁に爆撃が起きているので、外に出ることはできません。今では、爆撃の音を聞いても驚かなくなりました。戦車が教会の周りを走っているのも知っています。12月には教会の横にある校庭に停めていた私の車が爆撃で破壊されました。10月に戦争が始まってまもなく(10月19日)、この教会(聖ポルフィリウス教会)が攻撃され、17人の親族や友人が犠牲になり、多数の負傷者が出ました。そのためクリスマスは、誰も祝おうとはしませんでした。デコレーションやクリスマスツリーもなく着飾ることもせず、ミサのみが行われただけです。

私だけでなく全員が非常に辛い思いをしています。今、1つ言えることは、私が自分の家族のために願うことが紛争前とは全く違うということです。家族、そしてガザのために願うことはたった一つ、“平和”です。私の夢は家族と暮らし、自分や妻が仕事をし、暴力、争いのない環境で子ども達が生きられること、それだけです。そしてそれは、戦争や紛争が起こらない保証、人々が安心して生活でき、夢を持



10月19日爆撃された聖ポルフィリウス教会。17人の犠牲者と数十人の負傷者を出した。



近隣の住宅も被害を受けた。

ち、それが叶えられる、そして次の世代へと繋いでいける環境があることです。

今私が生活している教会は、私が子どもの頃から多くの時間を過ごしてきた場所です。私の人生にとってとても大切な場所であり、いつも自分を優しく迎えてくれました。ガザにおけるキリスト教徒の割合が少ないことから、コミュニティの全員が顔見知りです。今まで自分のいとこや親族ではなかった人たちがコミュニティの中で知り合った人と結婚することによって自分たちの親族となるのです。

しかし私たちは全員、次の爆撃で自分が死ぬかもしれないと思いながら生きています。

私は、ガザには“恐怖”と“苦しみ”の中でも、“希望”や“夢”を持ち、懸命に生きようとしている人々がいることを、大勢の人々に知ってほしいのです。ガザには、平和を願い、ただ平和に暮らしたいと望んでいる人々がいるということ。

プロジェクトで変わった「平和」への意識

小田有紀子 (2023年プロジェクト参加)

私は神戸市にあるキリスト教主義学校の教員です。私の学校では毎日礼拝が行われており、教員一人ひとりが「奨励者」として全校生徒の前で話す機会があります。私の奨励担当日は10月10日、8月に参加した「平和の架け橋プロジェクト」での体験を話すことに決めて準備をしてきました。すると10月7日にイスラム組織ハマスがイスラエルに突如、攻撃を始めたというニュースが入って来て驚きました。

その後もイスラエルがガザ地区へ報復攻撃をして、ガザの街がどんどん破壊されていくニュース映像が目に入ってきました。今回のプロジェクトで知り合ったガザの友人のことが心配になり、連絡を取ると、ガラスの破片が散乱している自宅内部の写真が送られてきました。本当にショックでした。

SNSを見ると、何人かのイスラエルとパレスチナの友人たちは怒りや悲しみを露わにした投稿を繰り返していました。それを見て、私は「平和の架け橋プロジェクト」で平和について、苦しみながらもみんな考えた経験は、今回の軍事攻撃によって簡単に塗り替えられてしまうのか!と何とも言えない気持ちになり、同時に「私たちが祈っても、悲惨な状況に置かれている人々を直接救うことはできない」という無力感も感じました。それでも、生徒たちには、キリスト教の学校で学んでいるからこそ、平和について自分なりの考えを持ってほしい、一人でも多くの人にイスラエル・パレスチナの人たちについて関心を持ってほしいと思い、私は考えていた内容で奨励をすることにしました。

奨励のはじめに、プロジェクトに参加したきっかけについて話しました。それは、礼拝の祈りの中で「わたしを平和の道具としてお使いください」という言葉に出会ったこと、その言葉の意味を深く考えたいと思っていたところ、ある新聞記事に出会ったことです。その記事には「平和の架け橋プロジェクト」の募集が載っており、「70年以上紛争が続くイスラエルとパレスチナの若者が、日本の若者と共同生活をしながら平和について語り合う」とありました。私は、このプロジェクトに参加したら、いろいろな視点から平和について考えられそうだと直感し、参加を決意したのです。



プロジェクト前には、「イスラエル・パレスチナの人たちが共同生活することは本当に可能なのだろうか?」と、これまでにない緊張をしたこと、実際に彼らと2週間共に過ごす、本当にいろいろな場面で、「喜怒哀楽」の全ての感情が色濃く出たことも話しました。もちろん楽しい時もありましたが、「平和」に関する対話ではやはり沢山の困難がありました。

イスラエル・パレスチナの人々それぞれが持つ大きな悲しみ、とてつもない怒り、そしてトラウマを目の当たりにすることになりました。ガザからの参加者が投げかけた「あなたは人の“死”に臭いがあることを知っていますか?」という問いかけが今も自分の耳にこびりついて離れません。自分には到底想像もできず、言葉を失いました。でも、そんな辛い経験をしているにもかかわらず、「これまでは空から爆弾を落としてくる「敵」としか思っていなかったイスラエルの人たちと会うのは怖かったけど、ここで出会った人はみんな親切で、温かく接してくれた。」と彼は話していました。

辛い過去と向き合うことに苦しみつつ、なんとか「敵を許そう」としていた姿が印象に残っています。一方参加者の中には、「やはりこれまで自分たちを傷つけてきた側の人間と目を合わせて話すことは正直きつい。」と言う人もいました。それでも自分のことを同じ人間として見てくれているから、この人となら友だちになってもいいかなと思える人を見つけ、自分の殻を破っている人もいました。このようにイスラエル・パレスチナ双方の参加者はプロジェクト中にたくさん葛藤していました。プロジェクト最終日にイスラエルの参加者がパレスチナの参加者に対して「私たちは分かり合えないところもあるけど、本当はあなたの前に座って、ちゃんと向き合いたいと思っている」と声をかけ、それに対してパレスチナの参加者は「私も本当はそうしたい。でも、今は簡単にはできない。だけど、いつかは向き合えるようになりたいと本当に思う。ちゃんと向き合いたい気持ちを持っていてくれて、ありがとうね。」という場面もありました。

このプロジェクト中にこのような葛藤を目の当たりにして、私は聖書の中にある「他人を許しなさい」、「敵を愛しなさい」という言葉は決して簡単に言える言葉ではないと思いました。一度敵対した人と向き合おうとする時には、互いが過去に遭った苦しみ、悲しみ、怒り、憎しみに向き合わなければなりません。それは痛みや苦しみを伴うプロセスです。でも、そのプロセスなしには再び関係を作り直すこと、もっと言えば、真の平和を再び実現することは不可能ではないか。このプロジェクトを通して私はそう思うようになったと、みんなに話しました。

プロジェクトを通して思ったことがもう一つあります。それはその人の悲しみ、辛さ、怒り、憎しみの気持ちを完全に理解することはできなくても、その人の気持ちに身も心も寄せて、相手を理解しようと真剣に目を見て話を聴くことはできるのではないかということです。私はイスラエル・パレスチナの人と一対一で話した時にそう感じました。誰かの悲しみ、辛さ、怒り、憎しみに向き合うプロセスで生じる苦痛に心を寄せて、そのプロセスを通過するための伴走ができれば、世界全体を平和にすることは不可能かもしれないけど、目の前の1人の人間の中に平和をもたらすことならできるかもしれない。そんなことを思いました。

生徒たちの中にも誰かといさかいをしている人、誰かに対する怒り、憎しみがある人、人間関係の辛さを抱えている人がいると思います。それらの感情に向き合うプロセスで苦痛を感じるのはイスラエル、パレスチナの人たちのような紛争の中にある人だけでなく、私たちも同じではないでしょうか。だから今、身近に、それらの感情に向き合おうとする人、怒り、憎しみに向き合うのが苦しい人がいたら、その人たちに心を寄せられる人でありたいと伝えました。決して簡単なことではないけれど、私たちが目の前の1人の人間の中に平和をもたらす存在になれば、その時こそ私たちそれぞれが「平和の道具」になれた瞬間だと思うと話し、これを奨励の最後の言葉としました。

礼拝の終わりに私はこう祈りました。

「主なる神様、今日も新しい朝を迎えることができたと感謝いたします。世界には爆撃に怯えなが

ら朝を待つ人、自分ではどうすることもできない理由で朝を迎えられなかった人もいます。そして、憎しみや怒りがさらに大きな憎しみと怒りを生む状況の人もいます。どうかあなたがその人たちと共にいて下さいますように。そして、私たちを誰かの中に平和をもたらすものとしてください。」

この礼拝のあと、「平和の架け橋プロジェクト」はNHKで何度か紹介されたこともあり、生徒の中には「先生、テレビで見ましたよ!この間の礼拝で話してたやつですよ!そして、井上弘子さんの話も聞きましたよ。」とってくれる子がいました。また、奨励を聴いた先生方にも「ガザの参加者にはもう二度と直接は会えないのか」と尋ねてきた人もいました。私が「分からない」と答えると、「その人ともう一度、直接会えたら、その時が『平和』なのかもしれないね。」と言われました。私はその言葉が印象に残っています。そして、いつか本当にそうなることを心の底から願いました。私の話が持つ影響力はごく小さなものでしょう。それでも、誰かたった一人でもいい、その人の中に「平和をつくる人」になる種が蒔かれていれば良いかと望んでいます。



「平和の架け橋プロジェクト」での一コマ。イスラエル・パレスチナ・日本の参加者がゆかた姿でお出かけ。(長野)

プロジェクトの総括

井上弘子 村上宏一

【はじめに】

「聖地のこどもを支える会」は2005年以来、イスラエルとパレスチナの若者を日本に招き、合宿生活の中で交流を図る「平和の架け橋プロジェクト」を続けてきた。コロナ禍で中断を余儀なくされたが、昨年夏、4年ぶりに再開した。当時も私たちを取り巻く環境は楽観を許すものではなかった。イスラエル世論の右傾化が進み、連立政権には極右政党が加わってパレスチナとの和平の機運は遠のくばかり。世界情勢も、ロシアによるウクライナ侵攻などで大きく揺れて、イスラエル・パレスチナ紛争への関心は薄れていた。パレスチナ人に自治区はあっても、ガザ地区はイスラエルにより完全に封鎖され、移動の自由も将来の発展の希望もなく、ヨルダン川西岸もユダヤ人入植地の拡大で土地を奪われ、イスラエル軍の武力行使などで実質的には占領下にある、との不満が高まっていた。

本プロジェクトでは、最終日に平和のメッセージをまとめることにしている。しかし今回は、意見の対立、特にパレスチナ側からのイスラエルに対する非難、不満が強く、話し合いがまとまらなかった。後に掲載の参加者による最終報告にも、その影が反映されているようで、10月7日にハマスが仕掛けたイスラエル攻撃の下地があったのかと思わせる事態だった。とはいえ、後述するように、プロジェクトに集まった若者たちは苦しみながらも、プロジェクト参加について「この体験は間違っていないかった」と前向きに評価している。

【プロジェクト準備】

●プログラム作り：いつもなら前年の暮れには準備に取り掛かっていたが、今回は実施できるかどうかの検討から必要だったため決定が遅れ、プログラムの検討が具体化したのは2月になってからだった。焦点の一つは、広島訪問を日程に入れるかどうか。円安が大幅に進んだことや物価高で諸経費が高騰し、宿泊費や交通費がかさむことになる広島行きはためらわれた。しかし、紛争を知ってはいても核兵器による惨禍を知らないイスラエル、パレスチナの若者が戦争・紛争を改めて考える機会になること、G7サミット開催地となるなどで広島がクローズアップされていることから、日程に加えることにした。

●協賛・後援など：実施に当たってはいつものように、ヨハネ・パウロ二世財団の協賛、在日イスラエル大使館、パレスチナ代表部およびJICAの後援を得たほか、広島では国際平和事業などに取り組むNGOのANT-Hiroshima、8th River Hiroshima、ソトカラヤ、市民の方々に助けていただいた。また今回も、日本人の若者も交えた長野での合宿の場として善光寺の宿坊・玄証院にお世話になった。

●費用：前述の円安の影響は航空運賃に顕著に表れ、とにかく4年前のプロジェクト予算を立てた時に比べ、ドルに対する円のレートは25%以上下がってしまったのである。参加費をそんなに上げるわけにはいかないので、航空料金さえ参加費でカバーできず、国内の交通費、食費をはじめとした諸経費もかさんだ。エルサレムの現地スタッフであるヤクープによるチャリティー・オルガンコンサートや、NHKの出川解説主幹による講演会でも寄付を募った。支援者のご寄付がなければ赤字は避けられなかっただろう。

●参加者の募集：4月半ば過ぎから応募書類の受け付けを開始、イスラエル、パレスチナからの19人の応募者とオンラインで面接をし、アラブ人を含むイスラエル人5、パレスチナ側からはイスラム教徒だけでなくキリスト教徒も含む5人を選出。日本人は応募者5人が全員参加した。ガザからの参加者は、ビザ取得には問題はなかったものの、在イスラエル日本大使館へ本人が出向けないためにパスポートの受け渡しをどうするかに苦労した。

●事前研修：これまではイスラエル、パレスチナ双方の参加者が比較的行きやすいエルサレムの旧市街で集まり、初めての触れ合い、話し合いをしていた。今回は、エルサレムまでそう遠くないベツレヘムからでもパレスチナ人は行きにくいなどの理由から、またリモート会合が便利という感覚が行きわたっていたこともあって、オンラインでの研修となった。それは日本人の場合も同じだった。

コロナ禍の中で急速に普及したオンライン会合は遠く離れた同士でも、日時さえ合わせれば特定の場所に集まらなくても開ける便利さがある。しかし、日本で交流を図る前に直接の触れ合いができなかったのが悔やまれる。このプロジェクトがただディスカッションをするだけでなく、人と人の触れ合いの場であることを意識するよう徹底できなかった。それが事前研修の重要な役目だったということ、改めて痛感した。今回、最終

的に平和メッセージをまとめられなかった背景には、和平への機運が薄くなっていたこと、特にパレスチナ側の不満が強かったことがあるかもしれない。しかし、触れ合いということの大切さを事前に強調できなかったことも大きな要因であったらう。

【プロジェクト実施】

広島での活動：8月9日(水) 昼頃～11日(金) 夕方

宿泊：アパホテル

広島でのプログラムについては、全面的にANT-Hiroshima (NPO) のご協力を得て、密度の濃いものとなった。平和祈念公園、平和記念資料館、平和記念大聖堂などの見学も、初めてこの悲惨な現実を目にするイスラエル・パレスチナの若者たちの心に大きな衝撃を与え、あらためて「戦争の愚かさ」と「平和の大切さ」とを痛感したと思う。

また被爆者の森下弘(ひろむ)先生の体験談を真剣に聴く若者たちの眼差しも忘れられない。筆舌に尽くしがたい体験をされてもお平和実現のために長年献身しておられる先生のお姿は若者の心に焼き付いたことだろう。

広島の若者たちとの対話集会を企画、実施して下さった8th River Hiroshima, ソトカラの方々にもお世話になった。あの廃墟から見事に復活した広島訪問を通して若者たちは、平和について、戦争について深く考える材料を豊かにいただいたことであろう。

長野での活動：8月12日朝～19日朝

宿泊：信州善光寺 玄證院

次のステップ、長野には早朝7時頃に新大阪からの夜行バスで到着。善光寺玄證院が宿泊施設を私たちに温かく提供して下さるのはもう5年目になる。またこのグループのためにセミナールームや大ホール、料理室などの使用を許可して下さった長野ボランティアセンターにも心から感謝の意を表したい。

8日間の長い共同生活と様々な活動の始まりだ。試練も苦勞もあったが、喜びも感動もあった。主なものを挙げる。

●戸隠高原への一日ピクニックとパーベキュー：イスラエル・パレスチナの参加者たちは、初めて見る大自然の美しさに感動。

●善光寺の「お朝事」体験：朝4時に起きて善光寺本堂での荘重な祈りに参加。さらに別の日には禅の手ほどきも受けた。初めての仏教体験をし、みんな感銘を受けた。

●浴衣でお出かけ：支援者のご寄付で全員分の浴衣と帯を準備し、長野のボランティア二人に着付けをお願い

した。初めてのゆかた姿に大興奮、互いに写真を取り合い、善光寺や市内の繁華街での散歩を楽しんだ。

●長野市民との交流会：会場は地元の方々、約60名が参加。ほとんどの方が、4年ぶりの再会だった。プログラムについては表の通りだが、市民の方々に3カ国の若者たちの「平和」に対する考え方を知っていただけたこと、また3カ国のダンスにしても料理提供にしても、交流会の運営で協力し合っている姿を見ていただけたことは良かったと思っている。

●ホームステイ：何年も前からホストファミリーとしてご協力下さるご家庭、また新たに加わって下さったご家庭に、イスラエル・パレスチナ人が、1人、あるいは2人ずつお世話になった。ホストファミリーそれぞれの最高の心温まるおもてなしをして下さったことを心から感謝！翌日それぞれが各ご家庭での体験談を分かち合った時、口々に、日本での最も素晴らしい思い出の一つだったと興奮気味に話していた。

●「分かち合い」：「今までの人生で最も苦しかったことは？」さて、本プロジェクトの最大の山場である。参加者はそれぞれ、紛争から来る苦しみや屈辱、愛する弟の命の危険を間近に感じた時の恐怖感、家族との軋轢、人生の挫折など、真剣に話した。ある者は涙ながらに。聴く側は友となった仲間たちの話に尊敬をもって耳を傾けた。もらい泣きをした者もいる。終わった後は、「君も辛かったね。」「あなたも苦しかったね。」「頑張ったね。」と長いハグ。互いの違いを乗り越えて一つになった瞬間だった。

東京での活動：8月19日(水) 午後～22日(火) 午前

宿泊：JICA東京国際センター

●ワークショップ：プロジェクトのまとめと「平和メッセージ」作成

午後に行われるシンポジウムの準備として3班に分かれてそれぞれ作業を始めた。残念ながらある班では、イスラエルの占領政策とそれに伴うパレスチナ人の苦しみについて口論が始まってしまい、険悪な雰囲気になる。退席する者も出たが、何とか話し合い、「発表」をまとめ上げた。

●シンポジウム：四谷聖イグナチオ教会ヨゼフホールにて 参加者：支援者、メディアの方約20名

プロジェクトのコアとなる部分は信頼醸成である。出身も国籍も性格も様々な若者たちが、「一つ釜の飯を食い」、お寺の和室で枕を並べて雑魚寝、掃除も炊事も洗濯も三つの班に分かれて協力して行く。どんなに違いがあっても、先ずは普通の人間として付き合ってい



長野・戸隠神社へハイキング。初めて見る緑の豊かさにびっくり、そして大喜び。

く。多様性を受け入れ合い、いたわり合い、助け合い、笑い合っていくうちに、少しずつ心がほぐれて結ばれて行くのである。そのためにアイスブレイキングゲーム、ボランティア活動、3カ国のダンスの練習をする。相手の国の文化やメンタリティーを尊重しつつ、力を合わせて一つのことを成し遂げていく。こうして互いに少しずつ信頼感を深め、連帯感を生み出す。相手を敵ではなく同じ人間として、友として受け入れられるようになる。「平和共存」の実体験である。このような体験を、生まれた時から紛争の中に生きているイスラエル・パレスチナの若者たちにしてもらうことが当プロジェクトの大きな目的だ。

この段階を経て初めて、人は自分の心の奥深くにしまっているイスラエル・パレスチナ間の長年の紛争の苦しみを口にすることができ、聴き手はそれを自分事として尊敬と共感を持って聞けるようになる。そしてそれが実現するためには日本人の存在が極めて重要となる。その上で初めて「すべての人の人権を尊重し、正義と公平に基づいた平和をつくるには、どうすれば良いか」という議論になっていくのである。

勿論それはいつもスムーズに行くわけではない。今年も大きな問題にぶつかった。上記のような若者たちの心の準備が絶対に必要であるにもかかわらず、今回は、まだそれが十分できていなかった長野到着の初日に、ふとしたことから、1対1でパレスチナとイスラエル参加者との間で紛争の問題で口論が始まってしまったのである。その場は、「紛争の話は後でするから」と収めたが、当のパレスチナ人の心には、「自分の話は聴いてもらえない、相手から過激派だと思われる」という思いが残ってしまったらしい。それが東京のワークショップでも再燃して、残念ながら今年は共同で平和のメッセージをまとめ上げることができなかった。

【終わりに】

4年ぶりの「平和の架け橋プロジェクト」の評価はと言われれば、前述のように、例年より厳しい結果であった、と言わねばならない。資金面の困難も人手不足も、

皆様の温かいご支援のおかげで何とか乗り越えることができた。

しかし肝心の若者たちの心の歩みは、一部ではあるが残念ながら、いつもよりずっと重く、ある参加者にとっては心の鎧を脱いで相手の話を聴くということが難しいように感じた。だから最後にいつものように友情と感謝の証しである「きずなゲーム」ができなかった。事前研修がオンラインでのみ行われて、プロジェクトの趣旨と目的を十分に理解してもらえなかったこと、また最初のオリエンテーションでみんなの心を一つに結ぶアイスブレイキングが、しっかりできていなかったからだと反省している。

しかし、参加者全員が無事帰国したのを確認して安堵したのも束の間、1カ月後、ハマスの奇襲攻撃から、イスラエルのガザへの軍事侵攻へと移行し、戦争状態になってしまった。以来4カ月半、双方でどれほどの尊い命が犠牲になり、筆舌に尽くしがたい痛みと悲しみと怒りと、そして絶望を味わっているか、ここで改めて記す必要はない。

このような惨状を目の前にして、私（井上）は、絶望と無力感に苛まれてきた。2005年から続けてきたこのプロジェクトの意味は何なのか、問い続けた。

幸い、かすかではあるが、希望の光が見え始めている。それは、上述のように、プロジェクト中は、「失敗」かと思われた「平和の種蒔き」だが、実は参加者たちの心にしっかりと種が蒔かれていたことだ。彼らの中には今、互いを思いやり安否確認のメッセージを送り合っている者がいる。彼らにとって「向こう側の苦しみ」は「他人事」でなくなっているからだ。イスラエル人もパレスチナ人も日本人も、ガザからの参加者を「友だちだから」と言って今も頻りに「励ましのメッセージ」を送ったり、支援金を送ろうとする者がいる。たとえ2週間でも「一つ釜の飯を食い」、同じ人間として向き合い、喜びも苦しみも分かち合った結果である。

真の平和は決して政治的駆け引きや利害関係の調整から生まれるものではなく、まず人の心から始まる。次の世界を担う若者たちが、互いに尊厳を持つ者として向き合い、相手の苦しみに共感し、対話を通して共生の道を見出して欲しい、これは当法人の心からの願いである。

今私たちは長いトンネルの暗闇の中にいるが、遠くにはかすかでも光が見える。それはプロジェクト参加者のような若者が一人でも二人でも増えて、真の平和作りに貢献してくれることなのだ。たった「一粒の種」でもいい。それがいつか美しい花を咲かせ、豊かな実を結んでくれることを願いながら。

参加者の思い

村上宏一

プロジェクトの参加者には「あなたの視点と目標は何でしたか？ 達成できましたか？」「このプロジェクトはあなたの性格や理解を伸ばすのに役立ちましたか？ どのように？」あるいは「プロジェクトでの経験に基づいた将来の計画は何ですか？」という質問に答える形で最終報告をしてもらいました。

今回のプロジェクトでは、ガザをめぐる衝撃的な武力衝突が起きる前でしたが、いつにも増してイスラエル、パレスチナ間の意見の衝突が激しく、報告文の中にも現状への不満や相手への非難を隠さないものがありました。平和の架け橋を目指すプロジェクトにとっては残念なこととはいえ、紛争の中で若者たちが何を考えているか、その一端を示すものだとも言えます。一人一人の報告から抜粋しながらまとめました。

経験生かそうと期待を胸に

今回のプロジェクトには、2度目の参加というメンバーが2人いました。イスラエル側から**タル (28歳)**、パレスチナ側から**ダリーヌ (29歳)**です。タルは「前回 (2019年) の参加でさまざまな人に出会い、共同生活をする中で、異なる文化を持つ人々と立場の違いを超えて、どのようにして共に生きていけるのかを学びました」と述べ、自分はイスラエルとパレスチナの対立についてよく知っていると感じ、「彼ら (パレスチナ人) のことをよりよく知ることに集中しようと思ひ」来日したのです。しかし、パレスチナ側に「相手と話す意思があるのか」と疑問を抱くようになったようです。

ダリーヌは、前回の参加で「立場の違う人たちと互いに受け入れ合えるという考え方を育ててもらった」と述べ、「共に参加したタルとの友情が今も続いているのを見れば明らか」と書いています。そして「パレスチナ側のリーダーとして非難や偏見を持たずにコミュニケーションを取らせようと努めた」のですが、「影響力に限界があった」と述懐しています。

彼女たちの意気込みがあまり実を結ばなかったことは改めて述べるとして、ほかにもプロジェクトへの期待が語られています。イスラエル人の**ルイ (26歳)**は、自分のイスラエル・パレスチナ紛争に対する見方は「かなり一般的でした」と認め、状況をより深く理解できるようになるという目標を持って参加。体験を経て「状況改善に貢献するためには探求すべきことがたくさんあることを学びました」と振り返っています。また、**ラハド (30歳)**のように、参加者について「意見や出身地の違いから憎み合い、対立するのを目にすると予想して



長野市民への「平和アピール」で「平和とは何か」について絵で説明。

いた」が、イスラエルのベングリオン空港に集まり日本への旅が始まると、「相手の話を聞くために心を開いてくれた人々と、政治的な問題の話から離れて日常生活について話し始めました」ということもありました。

「向こう側」にあった憎しみ

多くの参加者が、プロジェクトの終盤に意見の対立や「微妙な状況」が目立ってきたと書いています。「日本に来るまでパレスチナ人にほとんど会ったことがなかった」という**マタネル (27歳)**は「パレスチナ人の生活に共感できると確信していました」。彼は「イスラエルが行っていることのいくつかには同意できません。プロジェクトの中で、ほかにもいくつかの同意できないことを知りました」とも書いています。しかし「イスラエル国家に対する憎悪を動機として参加しているパレスチナ人がいた」と述べ、「向こう側」にどれほどの憎しみがあるかを知って、少し動揺したといいます。「幸いなことに、パレスチナ人の参加者の中にも有意義な関係を築ける人がいたことで、少しの希望を持つことができました」と書いているのは救いです。

同じくイスラエル人の**アンディ (25歳)**が「多様な背景を持つ人々と対話し、私が知らなかった歴史的真相を知る中で、私は自分が思っていたほどオープンマインドではないことに気づきました」と書いているのは、「向こう側」から受けた衝撃から、自分の対パレスチナ観を顧み、内省へと向けたのでしょうか。

パレスチナ人の**ハデル (29歳)**は「私たちにとって平等と権利は永続的な平和を構築するための基本的な要素であり、これには占領の終結、ユダヤ人入植地の解体、ガザ包囲の解除が含まれます」と述べています。過激な主張というほどではなく、ガザ在住の彼にとって「ガザ包囲の解除」は切実な問題ではあります。しかしイスラエル側からすれば、会話を進められない政治的主張と映ったのでしょうか。**リンダ (22歳)**はもっとはっきりと「パレスチナはイスラエルの占領支配の下

にあるというのが私の見方で、パレスチナ同胞への支援と差別的状況を終わらせることが必要だと繰り返し説明してきました」と強調し、逆にプロジェクトの議題がパレスチナ人の視点を反映していないと不満を漏らしています。

日本で開催することの意味

イスラエル、パレスチナ双方の意見、主張の狭間に立たされた日本人参加者はどうだったか。自分と年代代の両方の参加者から、日常に命の危険があることを聞かされ「場所が違うだけでこんなにも経験することが異なることにショックを受けた」という小田有紀子さん(29歳)は、「互いの歴史認識や、それぞれが思う平和の形の違いから、感情がぶつかり合う場面をしばしば見ました」としながら、意見が対立する中で「第三者の日本人から何か意見は」と投げかけられた時、両者をうまく取り持つことができなかったと悔やんでいます。

意見の衝突を「それはそれで心に残る出来事でした」と述べる大塚芽生さん(20歳)は「争い合っている人が本当の意味で仲良くなるには、お互いの心が痛む対話を乗り越えることが必要だと感じた」といいます。

それはともかく、広島訪問に強く影響を受けたという声が多くありました。「日本が戦争で荒廃した国からどうやって平和と技術革新の国へと変貌したのか知りたかった」というモハンマド(24歳)は広島について「都市は破壊の灰から平和の灯台へと姿を変えました。私たちパレスチナ人も多くの逆境に直面しますが、広島の人々と同じようにより良い日々を目指して耐える方法を見つけようと思いました」と書いています。

日本人の今村錬さん(21歳)も「核兵器がもたらした非人道的な惨状は、他者を理解しようとする努力と想像力が欠落した末のものだということを見せつけるものでした」と綴っています。また、長野の善光寺も「豊かな文化と深い精神性」が、モハンマドやリンダに感銘を与えたようです。

道は遠いが平和の種を蒔く

ダラ(21歳)は、アラブ系のイスラエル人という独自の立場からか、「イスラエル、パレスチナ双方の当事者と広く交流しています」。プロジェクトを通じて「紛争



プロジェクト報告会を終えて。



プロジェクト中練習してきた南中ソーランを踊りきって大満足!

の複雑さと紛争の激化をもたらす原因について、より深い洞察を得ることができました」と述べ、将来は「平和の構築者」となるのが目標だと述べています。そして、対話の促進を図るうえで「個人個人が安全で敬意を払ってもらえる環境の中で、懸念や不満を表明できるようにしたいです」と具体的に書いています。

今村さんは大学で中東の地域研究を専攻し、イスラエル・パレスチナ問題を中心に学んでいるので「現状の厳しさは知っているつもりでしたが、問題の根があまりに深く、容易に解決できるものでないことを目の当たりにした」と書いています。そして将来、この問題を一人でも多くの人に発信し、問題解決のためのきっかけを作る「平和の種を蒔く営み」を担う覚悟です。

日本のシンクタンクに就職が決まった鶴飼恵子さん(22歳)は、中東に焦点を当てた事業を目指す企業とかかわる可能性があるそうですが、「地域内で持続可能なビジネスを設立することは、紛争の抑止力として機能する可能性を秘めています」として、「合理的な意思決定による紛争解決の道を主張します」と、現実的なアプローチを考えています。

収支決算

収入の部		単位：円	
費目	摘要	金額	
支援金等	自己資金(受取寄付金)	3,037,144	
	イベント収入 (オルガンコンサートでの献金・講演会参加費)	827,108	
	参加費	2,334,720	
合計		6,198,972	

支出の部		金額	
費目	摘要	金額	
旅費	国内旅費	交通費(新幹線、高速バス、タクシー代他) 滞在費(宿泊費、食費など)	
	海外旅費	航空券代	2,273,490
人件費	事務運営費、スタッフ報酬		721,343
	謝礼		85,044
会議費	フェアウェルパーティー		89,430
	施設使用料		21,950
研修費	厳島神社拝観料、広島アクティビティ費用		61,063
情報発信費	オルガンコンサート・講演会等のチラシ、 ポスター製作費、報告書(オリーブの木)製作費		164,325
通信運搬費	通信費・宅急便代、報告書(オリーブの木)発送代		124,884
消耗品費	各種生活雑貨、Tシャツなど		83,156
雑費	支払手数料、その他		8,327
イベント費	イベントバザー用品仕入代		146,400
合計		6,198,972	

謝辞

当プロジェクトの主催者、認定特定非営利活動法人「聖地のこどもを支える会」および共催団体「中東のためのヨハネII世財団」は、イスラエル・パレスチナ・日本の若者がつくる「平和の架け橋～広島・長野・東京」2023プロジェクトの計画・実施に際し、あらゆる面で温かくご支援、ご指導下さった下記の団体および個人の方々、さらにすべての支援者の方々に対し、心から感謝の意を表します。

認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会 理事長 井上弘子

協力団体：協力者

駐日イスラエル大使館
駐日パレスチナ常駐総代表部
独立行政法人 国際協力機構 (JICA)

聖パウロ修道会若葉修道院
鈴木信一師 (聖パウロ修道会管区長)
カトリック麹町教会 (聖イグナチオ教会)

ANT-Hiroshima、渡部朋子 渡邊久仁子
世界平和記念大聖堂
森下弘 (ひろむ) 先生
8th River Hiroshima
ソトカラ
小泉直子 (通訳)
叶真幹 (平和公園ガイド)

ベロ・ガザウイ
ニコラス・ガザウイ
出川展恒氏 (NHK解説主幹)
株式会社トラベルハーモニー

信州長野善光寺；玄證院住職 福島貴和師
長野ボランティアセンター
長野のホストファミリー

オルガンコンサートのために
日本キリスト教団平安教会
日本聖公会奈良基督教会
日本聖公会聖オルバン教会
カトリック山手教会
カトリック藤が丘教会
日本基督教団横浜指路教会

一般支援団体

イエスのカリタス修道女会管区本部修道院
お告げのフランシスコ姉妹会
ジョファイユの幼きイエズス修道会
ナザレ修道院
シトー会那須の聖母修道院

聖心の布教姉妹会
聖クララ会修道院
メルセス会
聖公会神学院
ベルグループ
ワイズマン

その他

オルガンコンサートでの献金
(6教会にて)

個人

阿部佳子	大久保貞視	サトウフミオ	戸塚泰子	南武志
阿部幸子	大高由	境	中沢敦	村上大介
粟田健治	大谷恵美子	佐々木俊之	中島巖	村上宏一
荒川淑	大八木汜子	坂本直子	中野淳	毛利健三
荒谷由紀	大和四夫	櫻井房子	内藤和子	森下弘
青木洋子	尾崎一三	櫻井良輔	新島靖之	森本俊子
赤木啓子	大澤宏	清水峰子	仁坂光正	森本明子
朝倉富征	大浦安	渋谷八千代	西山菊江	矢島友子
麻生麗子	大森明彦牧師	白柳隆明	西村拓生	柳田和佐
Sr. 飯島喜久江	加藤健三	島崎淳	西井哲郎	矢作憲治
伊藤安以	加藤千恵子	須田茂乃	野地吾希夫	山口弦二
伊藤多恵子	加納貞彦	鈴木賢治	野田由利	山口裕子
伊藤裕幸	海堀真紀	鈴木典子	野白	山下義文
井口実紀	海野綾子	関屋スミ子	橋本和子	山田喜久子
井上英彦	笠原祥子	関山志ず江	春山美智代	山田康子
井上伸之	鎌田まさ子	聖和会 新井・笹川	林一江	山本
岩崎銀次郎	川村栄子	関弘仁子	馬場信子	山本強
岩崎修	川本和子	高岡レオ	東純子	山本公一
岩崎友彦	川野由起	谷垣宏美	肥田	横見晶子
岩田卓三	川上泰徳	谷弘子	古杉絢	横溝恭子
岩崎守	菊池いつ子	谷山正恵	深田久子	吉田とし子
今成紗羅	北原豊子	竹川典秀	藤江喜美子	吉田恵子
石黒朝香	北楯暢子	田川久美	福瀬くに子	吉田友一
入野智江	木村浩之	田村明子	淵上恂子	吉田良子
井西陽子	木村聡子	田中さわこ	福島良典	米嶋洋子
井出公平神父	熊谷マリ子	田中訓	福島賢一	渡部朋子
臼井信子	糸田治夫	田中弘子	細谷彬	渡辺上
遠藤浩一	黒瀧津哉子	田中智佳	本田維憲	渡辺由美子
遠藤香恵子	倉田昌子	田中博	本田江身	渡辺陽子
奥村聡	熊谷功二	田島久仁子	マツノクミコ	渡邊公伸
奥脇慎子	近藤典子	高橋秀美	巻島典子	亙理信雄
岡晶子	古閑	高橋泉	松田誠一郎・美智子	
岡智子	小林	高島文枝	堀正巳	匿名(2名)
岡島順子	小林仁美	高馬和子	榎谷紀子	
小坂田さち子	小林惇	高野和彦	萬井榮子	
小野修	小林麗子	出川展恒	宮下幸恵	
小野修	小里仁	外山経子	宮田喜久代	
織田	後藤礼子	戸井利子	三宅哲子	

戦争の現実 ハマスに拘束されている人質の解放を願って催された集会にて (テルアビブ)



撮影 森佑一

ピアノの手前に100とあるのは人質になって100日目という意味。



撮影 森佑一

人質が帰ってきた時のためにと用意された食卓。



撮影 森佑一

▲ ハマスがつくったといわれるトンネルを模したもの。内側にはこのようなところでとらわれている人質を思いやるメッセージが。



撮影 森佑一

平和と希望をさまざまに表現した ▶ アート作品も並んでいる。



撮影 森佑一



ガザ市の闇市。値段は日に日に高騰している。



10月、12月爆撃前の聖家族教会 (上・カトリック) と聖ポルフィリウス教会 (下・ギリシャ正教) (wikipediaより)

「平和の架け橋プロジェクト2023」の一コマ



長野市民への「平和のアピール」と楽しい交流会。



楽しかったホームステイ
ホストファミリーの皆さん、ありがとう！



イスラエル・パレスチナ揃ってハンドベルの演奏に参加。

写真撮影：森佑一、ダリーヌ・ラマ、川野由起、ハーデル・アルスラン、ラハド・シオ、小田有紀子、ラミ・アルジェルダ、聖家族教会